

平昌五輪から学んだ「社会関係資本」の概念 ～ カーリング競技の妙味 ～

(特非) シビル NPO 連携プラットフォーム

常務理事 有岡 正樹



これまでは自らが楽しむスポーツでもなく、また時差の関係もあつたりして、結果だけをニュースなどで知るのが常だった冬季オリンピックだが、今回は隣の韓国のピョンチャン(平昌)で開催ということもあって、結構生中継で見ることが多かった。その中でも、日本のクラブチーム LS 北見(ロコ・ソーラレ北見)が銅メダルを獲得したカーリングは、予選リーグ戦を含め、準決勝、3位決定戦まで入れると合計11回の対戦があり、途中試合のない日を含むとほぼ2週間、オリンピック開催期間のほとんどを使ってということになる。ボーリングと玉突きの延長位に思っていたのが、その内の何回かを見ていると、初めは知らなかったルールや戦略的なことも少しずつ分かって来て面白くなるから不思議である。

物静かに(とはいってもトーン(石)がハウス(円)に近づいてくるにしたがって、まるで声でその動きをコントロールする積りでは、というほどの声を上げ出す)、キャプテンやコーチを入れて10人ぐらいのグループが、それぞれの役割を果たしながらゲームを進めていくという点で、いま自分が取り組んでいるNPO活動に通じるものを感じさせられた。その背景には筆者がその活動を進める中で学んできたソーシャルキャピタル(社会関係資本)という社会的な考え方がある。このことについては、もう2年半前2015年10月の本通信Vol.18で「用語としての「ソーシャルキャピタル」の偶然」と題して寄稿したことがある。学際的、業際的にソーシャルキャピタルが、我々が関わる社会基盤(インフラストラクチャー)のハードとしての「社会資本」という意味と、それを利用する国民、市民の視点で重要な「社会関係資本」という両方の意味で、共に極めて重要な概念ではとの問いかけでもあった。一度遡って、それに目を通してもらえるとありがたい。

さて、今回の平昌五輪カーリング競技の準決勝、3位決定戦をTV生中継で見て、そして銅メダルが決定してのテレビや新聞による試合経過の報道や、選手本人はもちろん地元北海道北見の住民、そして日本国民の感激の思いの表現を再確認してみて、改めてその社会関係資本との類似点に思いを致した。

この1年日本大学法学部大学院の科目等履修生講義「ソーシャルキャピタル」で、日本ではその道の権威である稲葉陽二教授の下、「社会関係資本」の意味でのソーシャルキャピタル論を学ぶ機会があった。その教えによると、ソーシャルキャピタル(日本語訳:社会関係資本)とは、1993年にSocial Capital論を提唱したPatnumによれば、「協調的行動を容易にすることにより社会の効率を改善しうる信頼・互酬性の規範・ネットワークなどの社会的仕組みの特徴」(稲葉陽二著「ソーシャルキャピタル入門」2011.11)とある。何にでもソーシャルキャピタルに結び付けてみたくなる昨今だ。上述のカーリングの例を含めて、今回の平昌五輪から「社会関係資本」に関係して学んだことに触れておきたい。

LS北見は、チーム青森のメンバーでトリノ、バンクーバーと2度の五輪に出場経験のある本橋麻里主将が2010年に立ち上げたチームである。家族をつくり、楽しんで競技に打ち込

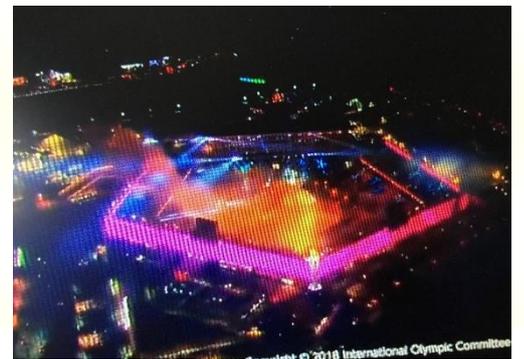
む海外チームに比較して、日本の「カーリングしかないというスタイルの限界」を感じ‘人間力のあるチームを作りたいというのがきっかけ’とされている。もともと自らが主将兼選手として最前線で活躍する意志であったが、ゲームは若者に譲り、自らは試合のない日の夜中も一人氷上に残って、氷の状態と選手の使うスィーパーがストーン(石)の滑りにどう反応するかを繰り返し、繰り返し確認するという、裏方に徹していたとのエピソードもある。信頼・互酬性の規範・ネットワークという社会関係資本のもつ3つのキーワードが一糸乱れず網羅されたチームであったことになる

これに対して、カーリングではないが女子スケートのマススタートで高木菜那選手が2個目の金メダルを獲った喜びを一面にわたって報じる朝日新聞紙面の右下隅に、‘「銀」の韓国選手客席に謝罪’という小さな記事が載っていた。同じくマススタートで2位であった韓国選手が、別の女子団体追い抜き競技で準決勝を残れなかったことに対し、インタビューで身内選手に責任転嫁したことに関してである。開催国韓国の地元選手であることもあって、ネット等で批判が集中した。そのままにしておけばそれで済んだかもしれないが、こともあろうにマススタート2位ということで韓国国旗を手にして場内を回った途中立ち止まり、韓国人国民の前で国旗を氷上に広げ座して詫びたというのである。この行為によりこうして他国の新聞にも載って、韓国そのものの国威を下げたことになる。ソーシャルキャピタルの成立要因の一つであるネットワークは、ゲームの理論と関係して評されることが多いが、まさに「囚人のジレンマ」と称する現象を見た気がしている。この韓国選手には今一つの要因である、情けは人のためならず、持ちつ持たれつ、お互い様といった「互酬性の規範」もなかったことになる。

紙面の関係でいま一つだけ触れておきたい。カーリングの作戦タイムの際に外国人コーチの英語が耳に入ったので相手チームの状況かと見入ったところ、日本チームでの輪であった。日本選手たちがそれに普通の英語で受け答えしていた。‘彼の素晴らしいところは人間性、彼から貴重な海外の情報も得られる’としてソチ五輪後にチームのコーチとして迎えたカナダ人である。銅メダルが決まった瞬間、目に涙をためて感激する5人の日本人選手と何回も抱き合っていたのが思い出される。今日2月25日の日経社説では‘平昌の成果で東京に弾みを’と題しての社説が掲載されており、海外で貪欲に技を磨き、海外からコーチを招いて成果を上げているという競技が他にも多い、ということを書いている。科学的な手法による選手育成などの成果を、AIを利用して分析する新しい時代に入ってきているということだろう。

この原稿をここまで書きながら横目でテレビの平昌五輪の閉会式を見てみると、夜空からそのメインスタジアムの外郭が正五角形にくっきりと映っていた。社会基盤（インフラストラクチャー）のライフサイクルに関わるハードとソフトの重要性を「五角形のこま」でモデル化（土木学会シビルNPO 推進小委員会著編「インフラ・まちづくりとシビルNPO」p237~243, 2014.11 参照）して話すことが多い私にとっては、LS 北見のカーリング銅メダル獲得の背景を知って得たいま一つの五角形の偶然としての思いが重なり、少しずつ‘ソーシャルキャピタルの必然’に勇気づけられるひとときとなった。

今年は人生で3番目のマイルストーンである75歳、いわば「白冬」というオマケの第4ラウンドに入る。白いキャンバスに雪景色を描くつもりでこの分野を学び続けてみたい。上述の「囚人のジレンマ」などを含め、2つのソーシャルキャピタルのいずれもが同時に必要という五角形モデルを用いて、建設業界の負の側面などに触れる機会がいつかあるかも知れない。



テレビに映った五角形のスタジアム